

〈奥〉の精神的考察

『讃岐典侍日記』（下巻）における時間・空間

川 本 豊

〔抄 録〕

本研究は、古典文学に表出される住まいに関する心性（ここでは住居感覚をさす）の歴史的な展開を説明しようとするものである。本論は、日本文化において特徴的な〈奥〉という心性について考察する。表―裏、外―内、ハレーケと二項対立的にとらえられる一方の側の裏・内・ケなどを総合した概念としてここでは〈奥〉と表記している。院政期の『讃岐典侍日記』下巻をテキストに、崩御を看取った後、堀河院ともろともに過ごした「時」を追慕するという特殊な時間と空間に繰り広げられる事象に着目し

読解を行う。〈奥〉という分析概念は、従来の文学研究では見過ごされがちであった作者の心情の内奥をもっとよく捉えうるものと考ええる。上巻については自分の外に拡がる〈奥〉の空間性をみたが、今回は、回想という自分の内に拡がる〈奥〉の時間性、さらに「時間―空間」相互の補完関係性が確認できた。

キーワード 奥、住居感覚、時間、空間、讃岐典侍日記

はしがき

本稿は、「住居感覚」に関する研究の一環である。あえて「住居論」ではなく、「住居感覚論」と位置づけ、間取りといった形態論をしばらく離れ、わが国において連綿と続いてきた「住まい感覚」の独自性について精神的な視点からの捉えなおしを試みるものである。

つまり近代西洋の建築学的な、平面図という上から俯瞰した視点ではなく、内に入り込んで、その時代への共鳴に基づいた考察という精神的な手法により、わが国の住まい感覚の試掘を行うものである。そこでは当時の一般の人々がもっていた想像世界を迫体験し、それを最大限に尊重する立場をとる。

具体的な方法論としては、わが国の古典文学のなかから基礎文献を

選り出し、そこに書かれていることをひとまず是とし、文面から汲み取れる心情を掬い上げ、その底に流れる大きなうねりから目的とする概念を探り出そうとするものである。人々の日常のなげない会話や動作などの営みから、その内奥(深層)の心の動きを求める、まさしく心性を含んだ精神史という立場をとる。なおそのときに、我々の考察がえてして陥りがちな、近代合理主義的解釈は厳密に排除されなければならぬことは当然である。

本稿では、平安時代末、いわゆる院政期に成立した『讃岐典侍日記』の下巻とされる部分について考察する。

『讃岐典侍日記』上巻をテキストとした前稿⁽¹⁾において、天皇の死という特殊な事象が展開される場に通底する觀念の一つとして〈奥〉という分析概念を設定し、崩御の看取りという場で繰り広げられた現象を読み解き、その心性を見いだす作業を行った。

そこで明らかになったことは、〈奥〉は、空間と時間という二面を持つていることである。空間的には、物理的な固定性がなく融通無碍に変化し、多重の観点を保持していることがみてとれる。一方、時間的には、看取りのプロセスとしての〈奥〉がみえる。生と死、あるいは顕と冥のオーバーラップしたゾーンにその一様態が確認できたのである。

今回は、天皇追慕の記とされる『讃岐典侍日記』下巻をとりあげる。作者長子は院命により、亡き主堀河天皇の喪も明けぬうちに、再び幼い鳥羽天皇に出仕を余儀なくされる。その幼い新しい主の眼前において繰り広げられる出来事と、亡き旧主への作者の回想とが複雑に交錯

することになる。この〈奥〉における時間性を中心にすえて考察を行う。

第一章

第一節 院政期について

院政とは、天皇家の家長である上皇が国政に関与し、それを主導する政治形態であるとされる。藤原氏を外戚としない後三条天皇が治暦四年(一〇六八)に即位し、摂関家をさしおいて親政を行った。そして早い時期に譲位し、その治世方針はその子である白河天皇に引き継がれた。後三条天皇は、上皇として自ら関与補佐するための譲位であったと思われるが、譲位後幾許もなく亡くなった。よって院政という政治形態は、白河天皇の第二皇子である堀河天皇がわずか八歳で即位した徳三年(一〇八六)から始まった白河院政を嚆矢とする。堀河天皇は在位のまま崩御したため、次の堀河天皇の第一皇子である鳥羽天皇(五歳で即位)の御世にも継承され、さらに次の鳥羽院政と続いていたのである。この狭間にあつて院政を布くことなく若くして早世した堀河天皇が『讃岐典侍日記』の作者藤原長子の主である。しかし堀河天皇は、早世とはいえ在位が二十一年にも及び、後の『続古事談』には「堀川院⁽²⁾は、末代の賢王也」とされ逸話が多く記されていることは前稿でもみた。

このように院政期の帝王は幼くして即位することが求められたため、後見が必要とならざるをえない。この院政の執行者である上皇は、天

皇の尊属親（この場合は実父となる）に限られたという事実は右の流れからもうかがえよう。天皇家の略系図をみるとこの時期が、実父からその子へと直線的に移行しており、その傾向が図像的にも裏づけられる。田中文英氏は、「国政の中心である天皇との関係をいわば家父長的論理で癒着吻合することによって、天皇の分身的権威と後見的立場を強調しながら、幼齡の主を扶持して朝政を相議し諮詢に応ずるという形でみずからの政治権力を国家権力のなかに位置づけることを正当化していったのである。」と指摘する。そこには時代背景として、同じ血族の中でも、母系親権から父系親権への移行・強大化が看取されよう。

さらにこの時期になると、社会的背景のみならず、天皇自身にもその意識に変化がみられるのである。益田勝実氏は、天皇が、死穢を忌むことによる清浄性に裏打ちされたその神聖性を保持する聖別者としての重みを、自らの負担（負の存在）としてとらえるように至ったとする。その傍証として二つの例をあげている。

まず、白河天皇の場合である。中宮賢子の死に際して、『古事談』をひいてその行動を述べる。応徳元年（一〇八四）九月二十二日、禁忌をもつとせず、廷内で中宮賢子の最期を看取るという、当時の慣習からすればとんでもない行動に出る。

賢子中宮は、寵愛他に異なる故に、禁裏において薨じ給ふなり。

御悩危急為りと雖も、退出を許されざるなり。閉眼の時、猶ほ御腰を抱きて起ち避らしめ給はず、と云々。

俊明卿は逆に、宮廷を死穢から守るため帝に行幸せよと迫るとい

異常事態である。禁縛と愛しさという相克において、天皇は己の私情をとつたのである。その行為は裏返せば、天皇の保持する聖性・神秘性の減衰、ひいては喪失ということでもある。

二例目は、鳥羽帝の場合である。『長秋記』をひいてその実態を述べる。長承二年（一一三三）九月十八日の条によると、堀河朝までは御剣は必ず夜の殿の御所にあり、主上も必ずこの夜の殿で寝ることになんら疑いもなく、かつそれがなされてきた。しかし、次の鳥羽・崇徳の二代になると、もはや夜の殿を捨て置いて、他所にて寝ることもあったと記すのである。天皇と宝剣は、自らを神聖化するシンボルでありまさしく不二一体であったが、ここに至って、崩れてしまうのである。院政期は、天皇が、現代風にいえば、人間性に目覚めたともいえようが、一方で、その聖性が希薄化する時代でもあったのである。堀河天皇が病床でとつた次のような行動とは、さほどの年月を隔てることもないながら隔絶の感がある。

「せめて苦しくおぼゆるに、かくしてこころみん。やすまりやする」とおぼせられて、御枕がみなるしるしの箱を、御胸のうへに置かせたまひたれば、まことにいかに堪へさせたまふらんと見ゆるまで、御胸のゆるぐさまぞ、ことのほかに見えさせたまふ。

（三九九頁）

これは『讃岐典侍日記』上巻第六段の記述である。堀河天皇は苦しみのあまり、枕もとの神聖の箱を胸に当てようとさえる。天皇家が営々と保持してきたその聖性が凝縮した箱によって、自らを苛むこの病苦を何とかできないかという切実な、しかも苦渋の思いである。右

のように堀河朝まではその禁縛が脈々と生き続けていたのであろう。そのあたりに先『続古事談』にある「末代の賢王」という逸話の正当性がうかがえよう。

ただし家という伝統には保守的であった堀河帝も、けだし長子との関係においては、そこから一步踏み出す自由を獲得していたと考えられる。ここでも天皇自身の内における微妙な変化が兆していることはみてとれる。

しかし時代はもはや動いてしまっている。天皇が自身の内において、聖なる「神」から「人」への転化を図りつつあるとすれば、それにかわる聖性を見つけ出さなくてはならない。神器と天皇との不二一体が崩れつつあるなかで、動かないモノとして、神器の聖性の肥大化が求められる。やがてその位置は取って代わり天皇の位置を凌駕していくことになる。この意味においても院政期とは、まさしく古代から中世へと橋渡しをする過渡期でもあった。

『讃岐典侍日記』上巻が、崩御の悲しみのさなか、昼の御座の方で、堀河帝の「御帳こほつ音」と、「神璽、宝剣のわたらせたまふとて、ののしりさぶらふぞ」という、代替わりのざわめきの記述で締めくくられているのがその間の事情を象徴的に表している。

さらに付け加えるならば、院政期とは、本論考に即していうと、天皇に対して、上皇の在り様はいわば「奥」に相当し、まさしく時代の政治形態が、文化・思想にも投影されているといえよう。

第二節 『讃岐典侍日記』について

『讃岐典侍日記』(以下、『日記』と略称)は、第七三代堀河天皇に典侍として仕えた、藤原顕綱女藤原長子の日記である。父顕綱が讃岐守であったため、讃岐典侍と呼ばれた。主である堀河天皇は、白河天皇の第二皇子として承暦三年(一〇七九)に生誕、応徳三年(一〇八六)に立太子、即日讓位、わずか八歳で即位した。幼帝であったため、父である白河上皇の後見が必至であり、ここに以後の院政の嚆矢となったのである。

『日記』は、上巻が、堀河天皇の嘉承二年(一一〇七)六月二十日の発病から七月十九日の崩御までの一月間に亘る「崩御看取りの記」であり、下巻が、白河院の命により鳥羽幼帝への再出仕をしながら、そこで繰り返される故院の「追慕の記」とされる。ここでの中心テーマである「天皇の死」という事象がもつ重たさは忘れてはならない部分であろう。現代の国文学の分野では取り上げられることの少ない作品ではある。しかし一二世紀後半の『今鏡』に「ないしのすけさぬきとかきこえ給し。こまかにかゝれたる文侍りとかや。」との記述があり、さらに二百年余り隔たった『徒然草』にも「鳥羽院幼くおはしまして、雪の降るに、かく仰られけるよし、讃岐典侍が日記に書きたり。」とある。中世を通じて、そのテーマの重さゆえに、その作者の名とともに、さまざまなかたちで読み継がれた作品ともうけとれる。

『日記』執筆の順序は、「上巻」が七月の崩御から再出仕までの比較的短い期間で、つぎに「下巻」が鳥羽帝を退出後のあまり時を空けないいしかるべき時期、そのまゝとて現在上巻の冒頭に挿入されている「序」の部分が執筆されたとされている。上巻については以下のよ

うなことも考えられよう。下巻の冒頭に書かれているように、堀河帝在位の最中から白河院は長子に対して、鳥羽帝（当時は皇太子）に仕えるようにと求めていたとある。つまり崩御の後には、憚ることなく再出仕の要請が必至であろうという予感自身にもあつたはずである。気分的にも感傷に浸るという余裕すら求め得べくもない状況下でありながら、しかしその哀しみにつき動かされての、あわただしい執筆だったのではないか。それゆえに下巻にみられるような、周到な筆致とは対照的なのである。

その文体の傾向は、石井文夫氏によれば次のように概括されている。

（傍線引用者）

上巻は、天皇崩御という切羽詰った状況下で、客観的に日時を識別することができないまま、事がらをその起ってくる順序に連続的にのべている。下巻は、客観的にとらえた時の経過の枠にはめて、事がらを月ごとに分けて断続的にのべている。

表現のしかたについても、上巻は、感情が先にたつて言葉が後に従う、いわば情意的文章とすれば、下巻は、感情を抑えて言葉を尽す、いわば説明的文章といえよう⁹⁾。

国文学的にはその通りであろう。しかし、その逆もまた看取されるのではなからうか。

つまり、上巻の方が却って、客観的日時はともかくとして、感覚的には時系列的出来事として理解しやすいように思える。また、下巻は逆に、月次の行事に沿った記述があるにも拘らず、時系列が混乱して、捉え難くなっているのである。

理由のひとつとして、上巻が出来事の記述であり、下巻は回想がその中心であることが考えられる。言い換えれば、上巻は、現実世界としての「顕界」（堀河帝の病床）での出来事に限られているが、下巻では「顕界」（鳥羽帝宮廷）の出来事のうえに、現実ならざる世界としての「冥界」（堀河帝への追慕・回想）への往信がかぶさって、両者が交錯していることに起因するのである。このことについては、本文を読み解きながら、確認することとしたい。そこに、当時の時間感覚（認識）がみてとれるのではないかと推測している。

第三節 時間について

本文読解に入るまえに、ここで、時間について確認をしておかねばなるまい。現代において、我々は、たとえば加藤周一氏が分類するような時間の型¹⁾について、さほどの違和感はない。

かくして日本文化のなかには、三つの異なる型の時間が共存していた。すなわち、①始めなく終らない直線Ⅱ歴史的時間、②始めなく終らない円周上の循環Ⅱ日常的時間、③始めがあり終りがある人生の普遍的時間である。そしてその三つの時間のどれもが、「今」に生きることの強調へ向かうのである。（番号は引用者追加）

しかし、ここでは、さらに別の時間のとらえ方にも留意しておかなければならない。加藤氏の場合は近代合理主義に基づいた認識であり、院政期の時間を考える上では誤謬を生じることになるかも知れないからである。

ここでは永藤靖氏の論を引いてその一助としたい。¹²⁾

永藤氏が採る、古代人の創出した神話や文学作品を素材に、その心の内部をさぐる方法論は、本稿と流れを同じくする。歴史的時間を非可逆的で一回起性のものとし、対して、神話的時間として、可逆的・反復的構造を付与する。さらにその神話的時間のなかに、循環的時間構造(持続的時間)と振動的時間構造(断続的時間)の二つの特徴を認めている。

循環するという時間のイメージの特徴は、それが一つの流れを持った持続であるという点にある。しかし時間観念の乏しい神話の中では、時として私たちに時間的世界として認識されているものが、空間的な世界として描かれている場合がある。たとえば昼夜の観念がそうである。神話の中に現れる昼や夜は、時間的なイメージを含まない。昼から夜へ、夜から昼へという移りいく時間としてとらえるのではなく、昼と夜を空間として考え、その間には移ろいゆく連続ではなく、むしろ断絶があると考えている。すなわち昼と夜は対立する両極であり、この交替はあたかも時計の振り子のような振動としてとらえられるのである。(二四頁)

二つのことに留意しておきたい。一つは昼と夜の非連続性であり、もう一つは、時間認識における空間性である。一連の研究テーマのキーワードとして設定した〈奥〉という概念において、この指摘は示唆に富む。一般的に「奥」は主として空間的な位置についての言葉としてとらえられがちであるが、わが国においては時間性をも含む言葉であることは、前稿でも確認したところである。

さらに、三宅和朗氏は、同じく古代の一日は、昼夜の区別とともに、両者の間の境界的時間帯として朝と夕があったと指摘する¹³⁾。異類の活動は夜を待たず夕方から始まるとし、朝は、夜における異類の跋扈の痕跡に驚愕する時間帯としてとらえる。それぞれがその入り口として存在していたと考えられる。昼は視覚が優位性を持った顕界として、夜は視覚以外の感覚が鋭敏に動員される冥界、そしてその境界として朝・夕という構成である。これは『日記』の時代においても未だ失われてはいない心性であろう。以上は具体性を持った一日において巡り来る時間感覚である。

抽象化された時間感覚として、石埜敬子氏は、日記文学が、回想される過去と、回想する執筆現在という二重の時間構造を有すると指摘し¹⁴⁾、それを、内面的に全体を統一するのは執筆時の作者の主観とされる。さらに付け加えるならば、日記を読む読者の時間があるう。日記の読解には、作者側の二つの時間と読み手側の時間という三者が交錯するのである。

以下、これらのことがらを念頭に置きつつ、本文の読みに入る。ここでは便宜上『日記』下巻の段落順に沿って読み進めることとする。なお前稿と同じく、本文の引用は、神宮文庫蔵村井敬義奉納本を定本とする、石井文夫校注・訳『讃岐典侍日記』新編日本古典文学全集二六(一九九四年 小学館)による。(以下、『新全集』と略称。段落番号・頁数も『新全集』によっている。傍線は引用者、以下同じ)また、次の諸書を適宜参照し、『新全集』と比較することとする。

玉井幸助

『讃岐典侍日記全註解』

(一九六九年 有精堂 以下、『註解』と略称)

森本元子

『讃岐典侍日記』

(一九七七年 講談社学術文庫 以下、『文庫』と略称)

小谷野純一

『讃岐典侍日記全評釈』

(一九八八年 風間書房 以下、『評釈』と略称)

第二章

第一節 悩む長子——昔のみ恋しくて

〔一〕「過ぎにし年月だに、わたくしのもの思ひののちは、人などにたちまじるべき有様にもなく、見苦しくやせおとろへにしかば、いかにせましとのみ思ひあつかはれしかど、御心のなつかしさに、人たちなどの御心も、三位のさてものしたまへば、その御心にたがはじとかや、はかなきことにつけても、用意せられてのみ過ぎしに、いまさら立ち出でて、見し世のやうにあらんこともかたし。君はいはけなくおはします。さてならひにしもぞとおぼしめすこともあらじ。さらんままには、昔のみ恋しくて、うち見ん人はよしとやはあらん」(四三〇頁)

嘉承二年(一一〇七)七月十九日、堀河天皇は二十九歳で崩御される。下巻の書き出しは、同年十月の記事である。自らの辛い運命を決定付けられて三か月たらず、自宅に下がって喪に服す長子に、幼い鳥羽帝への再出仕の命が予想通り白河院より届く。幼帝は誰であろう故院

の「御かたみ」であり、ゆかしく思われることも事実である。しかし自分の子ではない。複雑な思いが胸中を巡る。稲賀敬二氏が「堀河院の愛情についての自負と自信を持つ彼女は、同じく堀河院典侍である宗子が覚悟を生んだ事例を、きわめて複雑な気持ちで受けとめたであろう」と述べるように、自分も故院の忘れ形見をもうけられたかもしれないということが脳裏をかすめたことは想像に難くない。なぜなら〈奥〉にも、もともとあった自分であり、それ故にこそ、堀河帝を「人」として、一人の苦しむ病者として向き合いつつ、二人のまなざしの交感を描くことができたのであるという自負は失われていないからである。以後、さまざまな場面表現をとってそのことが表出されていることからそれがうかがえる。「思ひ」「御心」と、これらは内省表現である。さきに日記における時間表現についてのべたが、この部分は、そのいづれにも属さない、回想される過去と、執筆現在とを往還する運動性(振動)が感じられる。いいかえれば時間の空間性が表れているともいえる。そして結局、この言葉に行き着いてしまう。「昔のみ恋しくて」と。上巻序文にみられるような「心のどかなる里居」はもはや難くなるのである。月も変わり、十一月十九日、故院月忌みの追善供養の法会に、家人の反対を押し切って、大雪をおしても堀河院に参上することにより心バランスを保っているのである。

第二節 はぢがましきのみよに心憂くおぼゆ

〔四〕ほのほのと明け離るるほどに、瓦屋どもの棟、霞みわたりてあるを見るに、昔内へ参りしに過ぎざまに見えしほどなど、思

ひ出でられて、つくづくとながむるに、北の門より、長櫃に、ちはや着たるものども、蘇芳のこき、打たるくはうくの出し衣入れて、持てつづきたる、べちにおもしろく見ゆべきことならねど、所がらにや、めでたし。人ども、見さわぎ、いみじく心ことに思ひあひたるけしきどもにて、見さわげども、ただわれは、何ごとにも目も立たずのみおぼえて、南のかたを見れば、例の、八咫鳥、見も知らぬものども、大頭など立てわたしたる見るも、夢の心地ぞする。かやうのことは、世継など見るにも、そのこと書かれたるところは、いかにぞやおぼえてひきこそかへされしか、うつつにけざげざと見る心地、ただおしはかるべし。(四三七頁)

第四段は、同年十二月、鳥羽天皇の即位に帳あげを務めた段である。ここで留意すべきは、その風景描写であろう。实景のていねいな記述は、上巻では見られなかったものである。以降にもよく空間描写がなされる。なぜなのか。上巻では時間記述はいまいである。しかし、出来事としての看取りという事実が、死というゆるがせない時系列に向かつて肅然と進行しており、そこでは空間（風景）の描写は必ずしも必要とはみなされない。なくても場面の成り行きが理解されるのである。つまり空間性が後退していながら依然として優位性を保っているといえる。下巻では、月次行事に沿って、明確な時間表現をとりながら、回想という場面はその時間を行きつ戻りつすることになる。ここでは逆に時間性が優位性を保ちながら後退しているともいえる。その補完としての空間（風景）描写といえよう。時間と空間との相互作用がここにかがえる。

さらにここでの時間表現をみても、懐かしい昔日と、参内しているその日と、加えていつぞやの『栄花物語』を読んで想像した日々などが混然と入り混じっている。「夢」と「うつつ」の心地として記されており、回想の重層性がみとれる。これは時間における「入れ子構造」の表現の一樣態ともいえよう。

第三節 たがひたることなき心地して

〔五〕朔日の日の夕さりぞ参り着きて、陣入るるより、昔思ひ出でられてかきぞくらさるる。局に行き着きて見れば、こと所にわたらせたまひたる心地して、その夜は何となくて明けぬ。

つとめて、起きて見れば、雪、いみじく降りたり。今もうち散る。御前を見れば、べちにたがひたることなき心地して、おはしますらん有様、ことごとと思ひなされてゐたるほどに、「降れ、降れ、こ雪」と、いはけなき御けはひにておほせらるる、聞こゆる。こはたそ、たが子にかと思ふほどに、まことにさぞかし。(四三九・四〇頁)

年が改まり嘉承三年（一一〇八）元日、いよいよ皇居に参内する。その馴染んだ空間に身を浸すことによつて、ますますもつて亡き堀河天皇が偲ばれる。淡々とした単純過去の表出ながら、帝ご存命の当時においてはよくあつたように、ちよつと他所にお渡りになったただけなのだと自分自身を偽ることによつて、かろうじてその夜を過ごしているのである。事が展開される場所が変わらない。しかし受け止める側の思いは、すでに自身の思いとは裏腹に、時間とともに変わってしまった。

っている。ここに「空間」と「時間」の変化率の差異が示されているといえよう。そのずれも、あどけない幼帝の口ずさむ声でかき消されてしまう。なお、本文においても、たびたび声（音）が場面転換において効果的な役割を与えられていることは留意すべきである。

第四節 世はかくもありけるかな

〔六〕昼つけて、殿参らせたまひて、人々みなほりなどすれば、ものを参らせさして立たんも、おとなにおはしまいにぞ、さやうのをりもわかず立ちしか、また、おとなしうなども告げさせたまひしか、これは、うちすてて立たば、よきことやいはれんずると思へば、なほゐたるも、かくこそありがたかりけることを心にまかせて過ぐしけん年月を、いかで思ひ知らざらん。はしたなく思へば、うちうつぶしてゐたれば、御障子の外にゐたる人たちに、「あれは、たそ」と問はせたまふ御声、聞こゆ。「それ」といらふるなめり。御障子のうちに近やかについて、「いつよりさぶらはせたまふぞ。今よりはかやうにてこそは。そも昔の思ひ出でられたまひて恋しきに、そのかみの物語してなぐさめん」などあるいとかなし。われも人も、おなじやうにてこそものせさせたまふめれ。（四四一・二頁）

何の御返りかは申さん、もの申されねば、「思ひかけざりしことかな。かやうに近やかに参りて、ものなど申ししことは、思はざりしかな。例ならでおはしましをりなど、御かたはらに添ひ臥させたまへりしをりに参りたりしかば、御膝高くなさせたま

ひて、陰に隠させたまひしをり、かやうならんことどもとこそ思はざりしか。げに陰にも隠れさせたまひしかな。世はかくもありけるかな」といひかけて立たせたまひぬる聞くぞ、げにと心憂き。（四四三頁）

摂政忠実が参内する。上巻でもたびたび記述された天皇としての「公」がやってきたのである。その場に居合わせた人々は端に退き居ずまいを正す。「奥」から、公務の場として「表」への転回である。しかし今は、幼帝に食事を差し上げている最中である。故院のときは、思わず思い出す長子、そしてそれをそのときは気にもかけずに過ぎたことをあらためて記さずにはおられない。御障子の外と内とのやりとりという表現は当時の身分制に則った空間的秩序を明確に示している。そして、やはり同じ思いでこの場にいる摂政殿との対話になる。そこで披露されるのは、長子にとって、大きな思い出事の一つである、御膝の陰の件である。ある時間と空間を共有しえた者同士が、奥におけるさらに「奥」の現出という、何ものにも代えがたい故院との近い距離感覚として、回想しあっている。そこには「世はかくもありけるかな」という、これも同じ時間を共に経験したという想いが伝わってくる。ここでも、御膝で几帳をつくつてもらつた長子と故院との回想、そのことについて摂政忠実との回想、あるいは故院への単純回想、そしてそれらの回想の時間的立ち位置である鳥羽帝へのお仕えの場、そして執筆している時、などなど比較回想の時間性として、さまざまな時の表出が、ここでは何重にも交錯していることがみてとれる。

第五節 内裏にてありしところ

〔九〕昔の清涼殿をば御堂になさせたまひて、七月までは、宵暁の例時たえず、二十人の藏人町、左近の陣など、僧坊になりたり内裏にてありしところども、さびしげなる、見るにも、うせさせたまへりけん院のうちの、ひきかへかいすみさびしげなるを、御覧じて、

影だにもとまらざりける雲のうへを玉のうてなとたれかいひけん

とよませたまひけん、げにとぞおぼゆる。(四四六頁)

嘉承三年(一一〇八)三月、いつものように故院の月忌みに参上する。ここでも上巻には見られなかった風景描写がある。堀河院の変貌ぶりがつぶさに述べられる。建物や室の物理的な用途の変換であるが、それをあげつらうことによつて、心情がいつそう際立つように思われる。「玉のうてな」でさえも、時とともに「さびしげなる」様子に移ろつてしまうそのはかなさを、自らの奥の心性に重ねてみたとき、堪えがたき思いであらう。時間経過を空間変貌に置き換えての表現とみる。

第六節 そのをりは何とおぼえざりしこと

〔一二〕待ちつけて、泉の有様うちうちに関ひなどして、「扇引き、今宵は、さは」とおほせられしかば、「明けんが心もとなさに今宵と思ふに、人たちのけしきの暗くて見えざらんこそ、くちをしくさぶらへ」と申ししかば、つとめて、明くるやおそきとはじめ

させたまひて、人たち召しすゑて、大武の三位殿をはじめてゐあはれたりしに、「まづ、引け」とおほせられしかば引きしに、うつくしと見しをえ引きあてで、なかにわるかりしを引きあてたりしを、うへに投げおきしかば、「かかるやうやある」とて、笑はせたまひたりしことを、但馬殿といふ人の、「家の子の心なるや。こと人はえせじ」など興じあはれしに、そのをりは何とおぼえざりしことさへ、いかでさはしまるらせるにかとなめげに、今日は、ありがたくおぼゆる。(四五〇・一頁)

同年六月のことである。この部分は、上巻で考察した〈奥〉の現出である。「うちうち」「家の子」といった言葉がそれを裏付ける。「うちうち」とはまさに奥そのものである。少々のかわいいわがまは、天皇の奥に伺候する近臣のみが感受できるありがたさであらう。それが「こと人はえせじ」なのである。そして、そのときは、はしくもなんとも思わなかったが、今になるとそのことが身にしみるといのである。「そのをり」と「今日は」という言葉の並置が、当時と今という時間経過を際立たせる。長子が具体的な場所としての自らの立ち位置の確認をする条として有効な段であらう。

第三章

第一節 わが身もおなじ身ながら

〔一五〕香隆寺に参るとて見入れしに、「わが明け暮れ出で入りし門ぞかし。一昨年の十二月の二十余日にこそ、堀河院にうつろは

せたまひしか。それに出でけんまにこそはありけめ。かぎりの日とも思はず出でけんかし。今は、何ごとにてかはこの世にてまた入らんずる」と思ひしを、わが身もおなじ身ながら、またたちかへり入るぞ、心憂く、かなしくもおぼゆる。

同年は改元されて、天仁元年（一一〇八）八月、鳥羽帝は内裏へ移御となる。待賢門をくぐると、予想していた通り、何とはなしに自らの心が暗くなった。以前に、と引用文に続く。堀河帝に出仕当時は馴染んだ門であつたはずである。一昨年に堀河院に移られた折にこの門をくぐつたのが最後であつたのだ。しかしそのときはそれが最後になるとはついぞ思わなかつたものだと思ひがよみがえる。それがまた再び主をかえてくぐつてしまった。時を経たにもかかわらず「わが身もおなじ身ながら」どうして再びこういうことになるのか、忸怩たる思いが綴られる。「門」という一種の空間的結界というフィルターをおして時間が語られ、同じ身ながら以前とは異なる憂き心の哀しさが切々と伝わる。

第二節 今の心地す

〔二六〕つれづれのまに、よしなし物語、昔今のこと、語り聞かせたまひしをり、殿のあとのかたに寄りたてまつらせたまひしかば、そのまにてさぶらはんは、なめげに見苦しくおぼえしかば、起き上がりて退かんとせしを、見えまゐらせじと思ふなめりとおぼして、「ただあれ。几帳作り出でん」とて、御膝を高くなして、陰に隠させたまへりし御心のありがたき、今の心地す。い

つの変はりける世のけしきぞと、よろづの人たちのそのかみの人ならぬなかに、わればかりありし昔ながらの人、いかに結びおきける前の世の契りにかと、もののみ思ひつづけられて、あはれしのびがたき心地す。（四五七・八頁）

内裏に移られたその夜、鳥羽幼帝のそばに臥しながら、繰り返される内裏での営みを見聞きするにつけても、思いはどうしても堀河帝とのつながりから抜けでることができない。すつと、一昨年の御膝の陰の思い出にタイムスリップする。ここでの御膝の陰は、上巻の死の床に臥す場面とは異なる日時の出来事であろう。しかしこの同じ動作によつて、奥に〈奥〉をつくり、長子をかばうことは二人にとつては至極当然のことでもあつたのかもしれない。全巻をおして三回記述されている。甘美な思い出に浸れば「今の心地す」とはいえ、御世は移り、伺候する人々も移ろい、「わればかりありし昔ながらの人」というなかで、「前の世の契り」とまで述べて、その恨めしい時間をたどる。

第三節 見し人にあひたる心地す

〔二七〕参りて見るに、清涼殿、仁寿殿、いにしへに変はらず。台盤所、昆明池の御障子、今見れば見し人にあひたる心地す。弘徽殿に皇后宮おはしまししを、殿の御宿直所になりたり。黒戸の小半部の前に植ゑおかせたまひし前栽、心のまにゆくゆくとおひて、（四五九頁）

〔二八〕御前におはしまして、「われ抱きて、障子の絵見せよ」と

おほせらるれば、よろづさむる心地すれど、朝餉の御障子の絵、御覧ぜさせ歩くに、夜の御殿の壁に、明け暮れ目なれておぼえんとおぼしたりし樂を書きて、押しつけさせたまへりし笛の譜の、押されたる跡の、壁にあるを見つけたるぞ、あはれなる。(四六一頁)

〔二九〕内の大正殿朝餉の御簾巻き上げて、長押のうへに、殿さぶらはせたまふ。縁に、左衛門の佐、いと赤らかなる袍着て、ことおきて。(四六二頁)

これら三つの段は、具体的な空間を記述している。今見れば「見し人にあひたる心地」がするとまで述べ、内裏という、許されたものしかうかがえない内部を事細かに記述することにより、自分の位置を明らかにしようとしているとも受けとれる。これは下巻になると、読者というものを想定し始めたことをうかがわせる傍証の一つと考えられよう。

また、第一八段の「押されたる跡」についても検討が必要であろう。九月、幼帝を抱っこしてお連れしていたときのこと、壁に残された跡を見つける。これは夜の御殿の壁に堀河帝が貼っておかれた笛の譜の跡である。ここで重要なのは、これが笛の譜の跡であると知っているのが長子だけであることである。事情を知らない人にとっては、たんなる傷のようなものでしかない。その思い出におもわず涙することができるのも長子だけであろう。故院とのゆるがせない絆であり、「顕界」と「冥界」の哀しい往還である。その入口としての「跡」と見なければなるまい。鳥羽幼帝を抱いたまま涙する作者を再び現実

引き戻すのは、やはり幼い子どもの声である。大人たちの世界に一人あつて声を発する幼子と、旧帝の思い出にやはり黙して一人ずがる作者との、それぞれの孤立と交流も哀しい¹⁶。

第四節 向かひまゐらせたる心地す

〔二一〕雪の降りたるつとめて、まだ大殿ごもりたりしに、雪高く降りたるよし申すを聞こしめして、その夜御かたはらにさぶらひしかば、もろともに具しまゐらせて、見しつとめてぞかし、(中略)玉、鏡とみがかれたるものもしきのうちにて、もろともに御覧ぜし有様など、絵かく身ならましかば、つゆたがへずかきて人にも見せまほしかりしかど、(中略)わが寝くたれの姿、まばゆくおぼえしかば、「常よりみめほしきつとめてかな」と申したりし、をかしげにおぼしめして、「いつもさぞ見ゆる」とおほせられて、ほほゑませたまひたりし御口つき、向かひまゐらせたる心地するに、(中略)(四六五頁)

「これ、聞け。いみじき大事出で来にたりとこそ思ひあつかひたれ。雪のめでたき、御目さめぬる心地する」とて、笑はせたまひしなど、思ひ出でられて、つくづくと思ひむすばほるも、ただも御覧じ知らず、(四四六頁)

堀河帝には最後となった先年の五節の折、雪の日の朝の淡い思い出が綴られる。作者にとっては特に思い入れの多い段であろうか、文量も多くさかれています。さきにも確認したが、堀河帝はまだ往時の慣例どおり、夜には宝剣とともに、夜の御殿で共に寝るということが行わ

れていた。よって「夜御かたはらにさぶらひしかば」ということは夜の御殿に伺候していたと解される。雪が降ったとの知らせで、朝早く、雪を見るために二人で連れ立って寝所を出る。本段においても引用文の前後に、長くなるので略したが、風景描写・色彩描写がいていねいになされていることは、ここでも留意すべきことであろう。この情景描写によってやはり自分の立ち位置の確認が行われているのである。

「玉、鏡とみがかれたるもしきのうち」にありながら、そこに自分
はなんと「寝くたれの姿」のままで、さらに誰であろう天皇と共に在る
のである。本段には「もろともに」という言葉が二箇所みられる。こ
れが作者の主眼の一つであろう。天皇とともに朝を迎え、寝乱れた姿
のままで、もろともに清涼殿の雪を見つめる。一服の絵として描いて
いるようでもある。そこで交わされるわずかな言葉のやり取りも甘美
である。特別の人であるとも言いたげな記述は、その〈奥〉の特質
を際立たせて妙である。しかし、これだけの想いを表出しながら、全
体を通じて『日記』には、帝との贈答歌が記されていない。¹⁸二人にと
って「向かひまゐらせたる」状態こそが自然であり、まさにまなざし
の交感という「ことばのいらぬ世界」に結ばれていた二人称的關係と
いえよう。しかし、その奥に秘められた甘い思い出も、再び幼帝の声
で現実に戻されることになる。ここでも鳥羽帝という今（顕界）
と、堀河帝という昔（冥界）とが、入れ子状態になって交錯している
ことがみてとれる。時間の変化を、回想における時制の往来で表現し
ているともいえよう。

第五節 おはしますところ

〔二九〕十月十余日のほどに、里にゐて、よろづのことににつけても、おはしますましかばと、常よりもしのばれさせたまへば、御姿にこそ見えさせたまはねど、おはしますところぞかしといへば、香隆寺に参るとて、見れば、木々の梢もみぢにけり。（中略）（四七六頁）

「さばかりわれもわれもと男女のつかうまつりしに、かくはるかなる山のふもとに、なれつかうまつりし人一人だになく、ただひと所まねきたたせたまひたれども（中略）（四七七頁）

尋ね入る心のうちを知り顔にまねく尾花を見るぞかなしき（四七七頁）

年次の考証には諸論があり、この段の年期は確定されておらず不詳である。

堀河帝が崩御されて、「おはしますましかば」と懐かしさがつのるばかりである。いつにもまして偲ばれるので、香隆寺に参ることになる。それはなぜかといえ、「おはしますところ」であるからである。堀河天皇は火葬にふされた後、遺骨がこの香隆寺に安置されたという。「おはしますところ」の現代語訳を諸書で比較すれば次のようになる。

ご生前のお姿ではお目にはかかれなければならないけれど、おいでになる所だ、
というので、（『新全集』）

お姿にこそお見えにはならないけれど、「おいでになる所である」
というので、（『文庫』）

「(御生前の) 御姿ではお見え遊ばさなければいけません、いらつしやる所だ」というので、

〔評釈〕

ここではさらに加えて、本論に沿った考察をしておきたい。「おはします」とは誰が(何が)ということであり、「ところ」とは何処かという二点である。

堀河天皇は火葬され、その「身」は煙となって天空に昇ってしまった。しかし、当時の人々にとっては、その死の要因となった、身を離れた「魂」の行方にも心の中に抱いていたであろうことは想像し得る。その魂との出会いの入口となりうるのが、なにかであろう香隆寺ではなかったか。「顯界」にある長子が、「冥界」におられる故院に見(まみ)えるには、なんらかの境界をとおしてその魂に見(まみ)えなければならなかった。その入口に相当するのが香隆寺であった。入口としての「異界」と位置づけられよう。「おはしますところ」とは、そういう実体としての場所性を具した、総体としての空間性を意味していると考えられるのである。それゆえにこそ、次の引用の箇所となるのである。

「ただひと所まねきたたせたまひたれども」も現代訳を同じく諸書と比較しておきたい。

ただお一人で人を招いてお立ちになっておられるけれど、

〔新全集〕

作者の目には、寂しい尾花が先帝の御面影にみえたのである、と語釈する

〔註解〕

たったお一方で、人を招きながら立っていらつしやるけれども、

ただ御一方、(人を) 招いて立っておいでになるけれども、

〔評釈〕

いずれも原文に忠実な現代訳である。玉井氏は語釈で、尾花を先帝の面影とダブらせているとされる。しかし、それは長子にしか見えな姿であり、その場所としては右に見たように、先帝の魂のありかとして香隆寺の入口の向こうでなければならぬ。香隆寺の〈奥〉はまさしく「冥界」なのである。その冥界からのまなざしを受け留めた上で、次に引いた、数少ない長子自身の歌となる。つまり顯界にたえず自分の「心のうちを知り顔に」へとつながるのである。この言葉(歌)により、向こう側からの先帝のまなざしを長子がたしかに感受していることが確認できよう。

第六節 もろともに

「上巻一」思ひ出づれば、わが君につかうまつること、春の花、秋の紅葉を見ても、月曇らぬ空をながめ、雪の朝御供にさぶらひて、もろともに八年の春秋つかうまつりしほど、常はめでたき御こと多く、朝の御おこなひ、夕べの御笛の音忘れがたさに、なぐさむやと、思ひ出づることども書きつづくれれば、(三九二頁)

これは上巻の序に当たる部分であり、『日記』全体の冒頭に置かれている。しかし、執筆の順序からいえば、上巻(序を除く)、下巻、そして上巻におかれている序文とされておき、下巻ではないがここで最後に引用して検討することとした。略した短い引用の部分において

も、あるいは書かれている事柄がすべて本文において思いついて詳しく述べられていることをみても、この序文は本文を書き終わって後の全体の序として書かれたものとして首肯できよう。

全体を通してであるが、「音」の記述が効果的に取り入れられていることが一つ留意すべき点であろう。なにげない日常の音、哀しみにくれる声、モノを壊す音、笛の音は間接的にその譜の痕跡を記すことで表われ、幼帝の声は作者をしてたびたび異なる時間へと誘う。

しかし、ここでは「もろともに」という言葉を忘れてはならない。下巻第二段、ある早朝、寝たれ姿のまま、二人してみつめた清涼殿の雪の日は、まさしく「もろともに」であつた。その段に二箇所とこの序文に一箇所「もろともに」がある。

堀河帝と「もろともに」在ることが、作者にとつての〈奥〉なのであり、さらにそれは時間的にも、空間的にも、「もろともに」でなければならなかつた。思いもかけず故院となられてからも、「顕界」に在る長子と、「冥界」に在る故院の魂とはやはり「もろともに」でなければならなかつた。長子の切なる思いは、この両界を往還しつづけ、その閉じられた円環は、やがて『長秋記』元永二年（一一一九）八月二十三日の条にみられるように、ついに破綻をきたすことになるのである。

むすび

本稿では、亡き堀河帝の追慕の記とされる『日記』下巻について、

そこに表出される時間性の観点から〈奥〉の考察を行った。上巻は出来事が展開される空間の表出が優位を保っていたが、下巻では回想という時間の表出が優位をもっていると考えられるからである。当然のことながら〈奥〉という概念は、時間性と空間性の双方を包含した総体として設定しており、それは古来からの語義としても確認されている。

時間の捉え方としては、二つの流れをみておかなければならない。一つは歴史的時間として過去、現在、未来と刻まれるものである。下巻においても、たとえば、具体的な年次表記の他に、「昔」「今」「見し世」などと記される。これはいわば顕界における時間である。もう一つは、「前の世」「この世」「のちの世」といった言葉で表される時間である。同様に對比するとすれば、冥界における時間表現ともいえる。もちろん双方が厳然と区別されていたわけではなく、それぞれがまさしく時に応じて連関しあつて当時の時間認識の総体があつたと考えられる。

上巻においては、自分の外に拡がる〈奥〉としての空間性が認められた。今回の下巻においては自分の内に拡がる〈奥〉としての時間性を考えてみた。回想という心の内の現象は、空間というリアルを喪失しつつ、その心の内というバーチャルな空間における〈奥〉としてとらえうる。そこでは時間のみがリアルである。しかし当時においては、時間と空間とは区分されるものではなく、相互干渉（補完）の関係性が認められるのである。

なお、この「心」という言葉の他に、『日記』では「心地」という

言葉が多用されている。上巻では三十五箇所あり、下巻では三十七箇所もあった。さほど長いとはいえない本文における箇所数としては考慮すべき事象であると思われる。これは〈奥〉という概念にも関係するかもしれないが、その考察は今後の課題としておきたい。

さて、『日記』下巻における「時間」表現には大きく次の三つに分類できるであろう。

- ① 単純過去の表出 (思い出の記述)
- ② 過去の出来事を現在に引き付けて回想する (昔との比較回想)
- ③ 円環する時間表現 (回想の中にさらに回想が入り込む、いわば時間の入れ子構造)

たとえば、「今日は、ありがたくおぼゆる」や「今の心地す」といった表現は②の比較回想と考えられる。「向かひまゐらせたる心地する」というとき、そこには③の円環する時間表現が感知されよう。もちろんこれは大まかな分類であり、本文読解においてみたようにそれぞれが複雑に交錯しているのである。

さらにそこでは時間における空間性が浮かび上がることも確認した。それは古代からの時間認識の形態として認められたものである。下巻第一段でみた、回想される過去と、執筆現在とを往還する運動性(振動)は、いいかえれば時間の空間性が表れているともいえる。あるいは時間と空間との相互作用にも留意しなければならない。同第四段における、月次行事に沿った記述は逆に、時間性が優位性を保ちながら後退しているともいえ、その補完としての空間(風景)描写が際立つことになる。また、時間経過を具体的な建物や室の空間変貌に置き換

えての表現もとられている。

そして、亡き帝を中心に回想がめぐり、時間が円環を形成し、重層化して入れ子状態となり、作者のなかで閉じられたサークルが出来上がる。これはもはや「仕切り」であり、〈奥〉に通じることになるのである。「御姿にこそ見えさせたまはねど、おはしますところぞかし」といへば、香隆寺に参るとしてと記されるようにその入口が、ここでは香隆寺であり、「顕界」に在る作者は、そこからしか「冥界」に在る故院をまなざすことはできないのである。香隆寺の門の向こうはまさしく〈奥〉であり、そこが、再び往時のように二人が「もろともに」在る」ことのできる場所としての「時—空」なのである。さらにそこは、長子にとつての救済の場でもあったと考えられよう。

しかしその〈奥〉は、自らの立ち位置からしか見ることができず、求めようとしても〈奥〉は、するりとそのまた奥(向こう)へと移ることになり、〈奥〉への願望は永遠の目標にならざるをえない。この〈奥〉の本質として、実体のとらえどころのなさ、つまり〈奥〉は感受できているが、そのものを実体として見ることはできないというパラドックスを内包していることが確認できた。

〔注〕(出版年は便宜上、引用者において西暦年に統一している。)

(1) 池見澄隆『慚愧の精神史—「もうひとつの恥」の構造と展開—』

思文閣出版 二〇〇四年 佛教大学鷹陵文化叢書11
心性を含んだ精神史という本論考の手法は、右記著書をはじめとする池見澄隆氏の立場に拠っている。

(2) 拙稿「院政期における〈奥〉の精神史的考察―『讃岐典侍日記』(上巻)を中心に―」

(3) 田中文英『院政とその時代―王権・武士・寺院―』
『佛教大学大学院紀要文学研究科篇第三十八号』二〇一〇年
思文閣出版 二〇〇三年 佛教大学鷹陵文化叢書8

(4) 鈴木日出男編『益田勝実の仕事2』I 火山列島の思想
ちくま学芸文庫 二〇〇六年
『日知りの裔の物語―「源氏物語」の発端の構造―』
(初出は一九五九、六六年)

(5) 川端善明校注『古事談』(二一五三、一五二) 新日本古典文学大系四
一 岩波書店 二〇〇五年
(増補 史料大成) 源師時『長秋記二』(一七六頁) 臨川書店 一九六五年

(7) 『國史大系 第二十一巻下 今鏡・増鏡』吉川弘文館 一九六五年
『今鏡 巻二』すべらぎの中(たまづき)

(8) 久保田淳校注『徒然草』(第百八十一段) 新日本古典文学大系三九
岩波書店 一九八九年

(9) 石井文夫校注・訳『讃岐典侍日記』新編日本古典文学全集二六 小
学館 一九九四年
解説文(四八九頁)(なお、一部引用者により省略している。)

(10) 池見澄隆編著『冥・顕の精神史』法蔵館 二〇一二年刊行予定
「顕界」および「冥界」という言葉の使用については右記序文に拠っている。

つまり「顕界」とはわれわれの生きている日常・現実の世界であり、それを超えた非日常・非現実の世界を「冥界」とよぶ。平易には「この世」と「あの世」とも言えようが、空間性のみならず時間性も含んだ総体概念として表象するため、ここでは上記を使用している。

さらに「顕界」における「冥界」の現われを「異界」と称している。
(11) 加藤周一『日本文化における時間と空間』(三六頁) 岩波書店 二〇〇七年

(12) 永藤靖『時間の思想 古代人の生活感情』教育社歴史新書(日本史)一七六 教育社 一九七九年

同『中世日本文学と時間意識』未来社 一九八四年

古代的なものの崩壊、価値観の転倒が実は中世の文学作品の表現の核であるとし、時間の観点からは、時間は流れるという必然性を持ちながら、同時に偶然性を含んだ非連続なものとして意識される、とも指摘する。

(13) 三宅和朗『時間の古代史 霊鬼の夜、秩序の昼』歴史文化ライブラリー 吉川弘文館 二〇一〇年
古代の時間には朝・昼・夕・夜という人間の感性にかかわる時間と、漏刻による、機械的な時刻とがあるとし、地域社会の自然暦と国家の具注暦との関係に対応させる。(一二頁)

(14) 石埜敬子『讃岐典侍日記』の構成(二二二頁)
女流日記文学講座第四巻『更級日記・讃岐典侍日記・成尋阿闍梨母集』勉誠社 一九九〇年

(15) 稲賀敬二『讃岐典侍日記の死と生―典侍腹の御子たち―』『國文学』一九六五年二月 学燈社
「書かれていないものを読み取る事は許されないであろうか」、さらに、「書かれたものと書かれていないものの境界はどこで一線を引かれるのであろうか」という問いかけは、日記文学における心性の読解において、細心の注意が求められるが、示唆に富む。

(16) 岩佐美代子『宮廷文学のひそかな楽しみ』文春新書二〇二 文藝春秋 二〇〇一年

(17) 藤井由紀子『源氏物語』と中世王朝物語の距離―「わらわらか」・「寝くたれ」の表現史―
『詞林』第四十八号 大阪大学古代中世文学研究会 二〇一〇年一月

「寝くたれ」の用例は、『源氏物語』以前の散文作品の用例にはほとんど見出せなく、また、『源氏物語』における用例はすべて男君の姿であったとする。本来、女君の「寝くたれ」の姿は、第三者に見ら

れるべきものではなく、それを見ることができるのは、逢瀬の相手の男君だけである。

- (18) 篠塚純子『讃岐典侍日記』と人生―御ひざのかげ―『解釈と鑑賞』一九八一年一月 至文堂

- (19) 『増補 史料大成』源師時『長秋記一』(一五九頁) 臨川書店 一九六五年

堀河天皇の御霊と称し、あらぬことを奏上し、白河院の意向により、兄道経に預けられたとされる。

故院ともろともに在った〈奥〉の感受が、長子にとって救いの機能を果たしていたと考えられよう。しかし時間の経過とともに、その機能も衰え、ついには右記のような結果に至ったと想像できる。

この〈奥〉のもつ「救済」機能についても今後の課題としたい。

(かわもと ゆたか 佛教大学研究員)

(指導…池見 澄隆 教授)

二〇二一年九月三十日受理

